

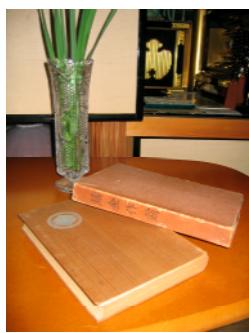
PDF表記ですから、このページ右上の
(虫眼鏡の+) のマークで拡大してご覧頂けます。



くら新の知れどくら篠温故なり。正期代におけびる、がさすさおける、「『明治・大正時代考』に、古きのさきのされ出された『義人義先生』が『こめて、「今が『古日』に、『こめるまえと『留れしま』に、『上にない』』』にあります。そこには篠栗町の神社仏閣について記されています。

青柳 種信著『筑前国続風土記拾遺』
福岡古文書を読む会校訂本87
には篠栗について記載されている。

妙福寺から少し下がった所に「藤 金作寿像と社会事業基金の碑」があります。
その御生涯を記された書籍「藤 金作翁」があります。
そこから妙福寺にかかるところを出しました。



正月後半には金余千五百圓を寄附した。

三十一年には金余千五百圓を寄附した。

三十一年には本堂を新築して田一畝四歩を寄附。

四十一年十一月には釋本尊を尼姑院の阿彌陀院に寄附。

四十三年九月には本堂を新築して金余千五百圓及び本堂佛像を寄附。一字庵に新設

「第一石門」、百段を建替を附し、賛に接内造候。基本財産として金八十五圓を額定して大般若

四十一年四月には釋本尊を知恩院宗祖大師七十年御歿大會費として金余千五百圓を寄附。

四十四年五月には久喜院安樂寺の見賣大資六百五十圓を送呈し、本堂前金堂後金堂一對を寄附。

同年五月には勝野山西御宿名を金五十五圓を寄附。

大正五年三月には勝野山西御宿及び同貫貴寺等に各大梵鐘を寄附。同年十月には宇治清

樂山圓滿寺に延慶寶塔を寄附。

六年正月に大本山唐土寺大映然再建費として金五拾圓を寄附。圓山庵之間仲馬持別信

從て記せられた。

七年正月には珠林寺に佛鏡及び鐘樓一宇間に右保存金五百圓を寄附。

十一年一月には勝野山西御宿安樂寺とて金余千拾圓を寄附した。

神社には御天子を、楚廟には焚燐をとおした折角の翁の念願も遂に言の如くならず、楚廟

おんなに忙うしい日でも、御連坐の時と外用先から歸つて来た時には、何よりも先づ御座を禮賀し、大臣の御前へ参りをして後でなれば、決して私にもものと言ふ事のない御内閣を最も大切な事の中心として朝夕勤めこみ仕人等が、はじきかる深く三實に歸伏しも思ひも想はなかつた。

藤家は浮舟の門徒。舊姓は藤原金出の藤林寺である。明治二十三年十二月には藤本山尼院の住之間侍博士にせられ、特別附合取扱依頼された程の御内閣はあつたが、藤家は明治二十五年十二月、若者自分の良女として藤原家かる育てられた愛姉タラを娶る前の眞宗寺跡附所にて入籍せしものである。書く讀むことのないのである。

明治十九年、その始祖寺が不争として脱魔の災に遭つた時に、爺は空室空英に足代を寄附したが、其後また再度空英上で移封再興事決するや、三十七年五月、同寺地及び圓童田として田三反九畝十八歩を寄附し、三十五年十月更に木曾川寄附の本堂佛殿販業に

妙福寺の境内に何処から来ているのかわからない鉄パイプ（今ではボロボロの状態です）があり、雨の後には水がしばらく流れています。昔は小学校プールが妙福寺の道向かいにありました、「この水は篠栗小学校のプールの水に使われとった」と聞いてきましたがその由来がこの書籍を読んで初めてわかったことでした。

諏訪神社水道碑
御幸の心を洗ふ當時の趣
大正十五年十月我孫栗町ハ氏神諏訪神社此處・移転・延段・造営其役ヲ著メ健闘開
潤神域勝利大功ア成セリ唯憾ムラクハ水源ノ被災シテ是ニ當神社爲メ惜ム所ナ
リ子會テ水源ヲ踏査シ南山麓谷ノ集水ヲ得タル以テ之ヲ水路ヨ等ナ更ニ落丁シテ而
水トナシ漸クニシタ社塀ニ達シ用水ノ便始メ開ケ而シテ此空堀ニシテ水路開張地
主ノ供費アリ道ニ土木功成ル見ル是ニ於テ乎は後祭祀奉事ノ用水完備シ又一分水
シテ大日山新田園井丸所ニ盛リ貯水池ヲ附近奉祀堂ニ住民ノ需用ニ供スルコトヲ
得タリ是レ關ヨ山水ノ最勝ア保胎スルミナラバ利府原生ニ植栽スル所亦節少タラ
ルヘシ茲ニ水道ノ由來ア記スト云爾